

## 日本三景をめぐる

予算委員会 専門員

おの りょうじ  
小野 亮治

最近 10 年程の間に、日本三景を訪れる機会があった。松島、天橋立、宮島、こうした日本三景という括りは、江戸時代のはじめ、全国を行脚した儒学者・林春斎が「日本国事跡考」において、卓越した三つの景観として取り上げたのに始まると言われている。この林春斎の誕生日に因んで、7月21日が「日本三景の日」とされている。各地域、各時代で訪れる人の増減は様々だが、いずれも現在、年間約 200～500 万人もの観光客で賑わう景勝地である（各自治体等のHP参照）。

宮城県の松島は、海に浮かぶ多くの島々からなる風景の美しさで知られている。松島を訪れたのは平成 22 年で、東日本大震災の前年であった。震災後、松島の状況が心配されたが、松島の被害は他の沿岸の地域に比べると奇跡的に小さかった。震災当時、海岸からわずか数百メートルの瑞巖寺が避難所となっていたことから、松島の島々が天然の堤防となり、津波の被害が比較的小さかったことが想像される。松島は東日本大震災により観光客が大きく減少したが、その後、なお震災前には及ばないものの、回復してきている。

京都府の天橋立を訪れたのは平成 26 年。天橋立といえば白砂青松という言葉が思い浮かぶが、最近、白砂に混じる雑草に悩まされている。松の木は放っておくと、落ちた枝や葉などで土地が栄養豊富な腐植土となり、雑草などが育ちやすくなる。台風や大雪の被害で多くの松の木が倒れたが、腐植土により松の木のバランスが悪くなったことが原因の一つ。昔は燃料にするため松の枝などが拾われ、腐植土の拡がりや抑えられたが、近年はこうしたことがなく、松の木が被害を受けやすくなっている。地元旅館の方の話では、雑草取りを兼ねた観光ツアーを企画しようかと考えているとのこと。現在は、主に地域住民やボランティアにより雑草等を取る活動が行われている。

平成 28 年に訪れた広島県の宮島は、瀬戸内海に浮かび、平家一門の信仰や後白河法皇の参詣など様々な歴史が積み重ねられた島で、海岸にせり出したつくりの巖島神社で知られている。巖島神社は、平清盛により現在の姿に造営され、自然の中にある雅やかな社殿や朱塗りの大鳥居が特徴的だ。但し、独特のつくりゆえ、本社拝殿をはじめ幾度も台風による強風、高潮等の被害に遭い、修復が重ねられてきた。その様子は、度々、ニュース等でも報じられている。

「明日の日本を支える観光ビジョン」（平成 28 年 3 月 30 日、明日の日本を支える観光ビジョン構想会議決定）では、平成 32 年（2020 年）に訪日外国人旅行者数 4000 万人・消費額 8 兆円、日本人国内旅行消費額 21 兆円とする等の目標が掲げられている。日本三景は、いずれも自然災害等に見舞われながらも、地元をはじめ多くの方々のご苦勞とご努力により、日本を代表する景勝地として、毎年多くの旅行客が訪れる地域となっている。観光立国と言われる昨今、改めて、これからも末永く守っていききたい日本の宝の一つと思う。